



心のギアチェンジ

大阪府大の久本先生からリレーを引き継ぎました東北大の西澤です。先生の「飯屋と飲み屋は研究のインフラである」という論理(?)に、筆者は大いに賛成です。実際、学会(の後の飲み屋)での仲間との楽しい語らいは、研究を続けていく上での精神的な支えとして欠かせません。度が過ぎて、二日酔いに苦しむこともしばしばですが、「よし、また、がんばろう」という気持ちになることができます。ちょっと大袈裟に言えば、元気と勇気が出てきて、一種の「心のギアチェンジ」のようなものだと思うのです。ここでは、この「心のギアチェンジ」について考えてみたいと思います。

もう20年も昔の、北大教養部の学生の頃の一枚の写真から話を始めます。当時、私は応援団(吹奏楽)に所属して、応援団の先輩方と一軒家を借りて住んでいました。一軒家といえば聞こえは良いのですが、それは恐らく戦前からあるもので、建築当時はモダンであったと想像される開拓時代風の建物も、すっかり老朽化しており、札幌の厳しい冬を越すためにはすべての窓をビニールシートで密閉する「冬囲い」が必要でした。それでも換気は充分で、吹雪のときなど家の中にどこからか雪が舞い込んでくる有様です(本当の話です)。イメージ的には、倉本 聰脚本の「北の国から」の黒板五郎の家(正確には言えば3番目)にかなり近いものです。しかし、私たちはその一軒家がすっかり気に入って、大家さんが深澤さんであったことから、勝手に「深澤マンション」と名付けていました。通称「深マン」で、郵便物や宅急便もちゃんと届きました。写真は、この深マンの一室で、年賀状用に撮影したものです。

一人一人、新年に向けての抱負や決意を書初めとして記しています。例えば、中央左側の辻さんは、商社に就職が内定していましたが、「商人(shoujin)します」、利倉さん(左端から2番目)も新社会人になる決意として「一騎当千」で、希望に満ちた意気込みが感じられます。一方、私の場合(右端)、学生の本分である学業に関して相当な危機感を持って撮影に臨みました。すでに一度留年していたにもかかわらず依然として学業に身の入らない状況で、まさに「大変身」する必要がありました。幸い、その年の春に2年生に進級、秋には理学部化学科に進学することができました。化学科進学が決まったとき、心の底から嬉しいと感じました。

多くの人は難なく進級、進学していきますから、こうした状況はちょっと理解され難いかもしれませんが、単なる怠け者だと思われる方もいるかもしれません。ただ、この頃に一大決心し、心のギアチェンジができたことは確かです。ようやく勉学を中心とする大学生活に切り替わりました(学業成績は別問題ですが)。化学科に進学してからは、とにかく化学(chemistry)が面白く毎日ワクワクして過ごしました。当時、北大教授であった



写真 「深澤マンション」のメンバーと(昭和62年12月)

梅澤喜夫先生(現武蔵野大)とお話をして、「大学の先生は何か違う」と感じ、その影響で分析化学を専門として選びました。久本先生(当時、慶應大鈴木研B4かM1)と初めてお会いしたのもこの頃で、よく喋るし、やる気満々で、圧倒されっぱなしでした。

さて、心のギアをいつもハイにすることは必ずしも容易ではありません。仲間との飲みや趣味での気分転換では対応できないこともあります。そんなとき、私にとって「信仰」が大きな支えとなっています。胡散臭く感じる方もいるかもしれませんが、本当です。私は仏教徒で、クリスチャンの方が教会に通われるように、休日にはお寺に通います。これは、博士課程に在籍していた頃からで、結婚してからは妻と一緒に通っています。理論や理屈で説明することはちょっと難しいのですが、「がんばろう」という気持ちが湧いてきます。

余談になりますが、「大変身」に込めた意味を仏教用語で敢えて説明すれば、「転生出離(てんしょうしゅつり)」に相当するかと思います。「転生」とは心の立て替えて、それを継続し実践していくことが「出離」です。ご存知のとおり、4月8日はお釈迦さまの誕生日「降誕会(こうたんえ)」です。この日は、仏教徒にとってお釈迦さまのお誕生を祝福するとともに、自分たちの心の誕生日として実践を期する「転生出離」の日でもあるのです。本当に「転生出離」するためには、お不動さまの「不動の心」を確立することが大切になります。私の場合、「不動心」が「浮動心」の段階で、理想には程遠い状態ですが……。なんだかしまりのない話となりました。どうかご容赦ください。

今回は、深マンに住んでいた学生の頃からご縁のある、北海道大学の谷 博文先生に御願いました。ご期待ください。

[東北大学大学院理学研究科 西澤精一]